

『オバジーヌの聖エティエンヌ伝』 試訳 (五)

北 館 佳 史

本稿は『オバジーヌの聖エティエンヌ伝』の試訳である。今回訳出したのは前回の続きにあたる第2巻の56章から第3巻の16章までである。

翻訳の底本としてはオブランの校訂版 (Aubrun, M., ed., *Vie de saint Étienne d'Obazine*, Clermont-Ferrand, 1970) を使用し、章と段落の構成は同書に従った。現代語訳としてはオブランの同書の仏訳とペピンの英訳 (*The Lives of Monastic Reformers, 1: Robert of La Chaise-Dieu and Stephen of Obazine*, trans. H. Feiss, M. O'Brien & R. Pepin, Collegeville, 2010, pp. 129-255) を参照した。

聖書引用は『新共同訳聖書』に依るが、文脈に合わせて一部変更を加えた。

56. ある修道士が許可を得て修道院を出たいと思い、このために神の聖人を毎日煩わせたが、許可は得られなかった。ある日、彼は集会室でこの件について許しを請うた。しかし、聖なる人はこの者の求めに応じることを望まず、彼の頑なな意思を挫くこともできなかったのもので、とうとううんざりして「もし本当に出ていきたいならば、まず、自分が借りたものを返しなさい」と彼に言った。修道士が「何をですか」と言うと、「罰を受ける用意をきなさい」と答えた。用意をすると、聖人は鞭で強く打たせたので、そこにいた人々はみな震え上がった。修道士が立ち上がると、「お望みならば、もう出ていきなさい」と言った。この兄弟はさらに激して、立ち去りたい衝動に駆られたと思われるだろうが、「主よ、私は生涯ここか

ら離れず、あなたをお見捨てすることはありません。あらゆる誘惑が完全に断ち切られたので出ていきたいとは全く思いません」と答えた。この時に修道士の中の悪魔がまるで鞭打たれたかのように遠ざけられ、追い払われたことを誰が疑うだろうか。

このように聖なる人は打つことと癒すこと、地獄に導くことと連れ戻すこと、ある意味で殺すことと生かすことを心得ていた。ある者は優しい言葉で、ある者は叱責で、ある者は喜びで、ある者は厳しきで、ある者は好意で、ある者は鞭で矯正し、人生の小道に連れ戻したのである。

57. しかし、本題に戻ろう。エティエンヌは彼の前で起こったすべてのことの裁判人であり、証人であり、先延ばしできない場合は即座に、あるいは後日ふさわしい機会に裁きを下した。このために、訪れた場所から立ち去る前に、戒律に従って兄弟たちを集めて会を開いた。集會を主宰し、厳しく罪を咎めたので、恐怖で震え上がらずに集會に入れるほどに自らの徳と院長との友情に関して凶々しく思い上がった者はいなかった。エティエンヌは自らが建てたすべての場所を公平な正義をもって治めることに常に力を尽くした。そのため、彼がそこにいるとみなされるか、これから来ると予想される時は、いつでもどこでもすべての人に恐れられた。

過度の矯正で誰かを悲しませたならば優しい言葉やおそらく好意やさらには友情のキスでその者の魂を和らげないと気が済まなかった。そして、この者は悲しい思いをさせられたのは自分のためであること、このために聖なる人の恩恵を受けたことを喜んだのであった。しかし、彼はこの恩恵をすべての人に平等に与えたわけではなく、益することがわかっている人にだけ与えた。槌で砕くことはできるが、彫ることができない最も硬い石のように、鞭で矯正できるが、言葉やお世辞では説得できない者たちがいるからである。実際、「頑固な者には鞭を加えなさい。愚か者は言葉で矯正できないのだから」と書かれている¹⁾。

58. エティエンヌはその教えと手本ですべての兄弟を指導したので、卓

越した生き方の徳によって、他の人々や他の修道者たちだけでなく、同じ慣習と修道服の榮譽を受けた人々とさえも異なっているように見えた。たとえ公の場所で馬に乗っていても他の場所を歩んでいても、衣服と足並みから彼らだとわかるので、すぐにどこから来たのかが明らかであったからである。準備をせずに、しかるべき理にかなった理由もなく旅に出る者はいなかった。見知らぬ場所で食事や滞在をする者もいなかった。誰も街路や通りを歩くことはなく、頭を隠して規律正しく村や町の中を通り抜けるか、外から通じる小道を通して目的地に到達するかした。実際、この当時、命令や避けられない必要に迫られない限り、集落に入ることはなかった。たまたま誰かに何かを語ることがあっても、非常に用心して自らの言葉を吟味したので、誰もそれを十分には理解できず、また聞き咎められることもなかった。

偉大な師の弟子たちとみなされたこと自体、彼らがあらゆる点で非の打ち所がないことの最も確かな証拠とされた。

ある高貴な婦人が自分の家の窓際に他の多くの人々と一緒に座り、外を見渡すと、遠くに修道服を着た二人の兄弟が馬に乗ってくるのが見えた。彼らの目に見える兄弟たちがどこの修道院、あるいはどこの修道会の出身かに確信を持たずに尋ね合っていると、この婦人はまだ顔を見てもいないのに彼らはオバジーヌの兄弟ではないとためらうことなく主張した。まもなくそれは証明された。というのも、彼らが近くに来て、婦人が正しかったことを自らの証言で確認したからである。実際、だらしなく馬に乗り、修道士らしくないのを見て、このような弟子たちがあれほど偉大な師の学校の出身であるとは考えなかったのである。

59. 実際、エティエンヌが話し、立ち、歩き、何か他のことをするのを見て、そこから何かの教えを汲まない者がいるであろうか。些細なことをいくつか思い起こすと、誰かが見苦しく露骨につばを吐いたり、歯を見せて話したり、笑ったり、騒がしく歩いたり、食べたりすることを彼は望ま

なかった。また、外衣を脇に置かずに座ることも嫌がった。座ったところで生地がすぐに破けないように、そして、座った人の背中の下の方が傷んでも、その傷みが背中ではなく、どこか恥ずかしくないところに見えるようにしてほしかったのである。

彼がいるときには、聖堂であれ他の場所であれ、集まりがあるところでは、不適切にあくびをしたり、微笑んだり、不規則に話したり、怠慢や軽率のしるしを見せたりする者はいなかったし、おこがましくも欠乏について不平を言ったり、師の命令に反抗したり、反論したりする者もいなかった。

60. 彼はまた祭壇の奉仕者たちがきちんとした服装をするように熱心に配慮した。見苦しく不格好な者が礼拝に参加し、見ている人々に教育ではなくスキャンダルを提供しないように、彼らの服装を自ら注意深く整えた。

彼自身が聖なる服を非常に適切に身につけていたので、衣服がまるで生まれつきのもののように見えた。誰も、それを知っているのではない限り、彼がククラの中に着ていることがわからなかった。

祭儀を執行するときが来ると、彼は心と顔と目を神に向けた。ある人々がするように飛び立つように手を高く伸ばすのではなく、自分の周りに十字架の形にして少し手を広げて、聖体に十字架のしるしをする準備が整うまで神の前で身じろぎしなかった。再び我に返ると、咳もため息もうめきも漏らさず、神の眼差しに純粋な心と熱く涙にぬれた精神を捧げた。焼けつく太陽が海に沈み、さらに光り輝いて昇るように、涙の雨にぬれた彼の熱い精神が神の目の前でより純粋になって現れ出た。

それから、ミサが終わるとすぐに、聖なる祭壇を亜麻布でしかるべく整えた。祭壇が剥き出しにならないように、亜麻布から何一つ見苦しく出ないようにした。上は水平に、下は等しく垂らし、四方をきちんと整え、塵一つなくきれいにした。そして祭壇の周りには、彼が出て行った後、見苦

しいものやふさわしくないものは何も残っていなかった。従者が側に控えていたが、自分が脱いだ祭服は自分の手で畳んだ。このように熱心に行くことで進んで行おうとしない人々を教育し、他の人々に教を示し、重要な職務に従事する者で同じようにすることを拒む者がいないようにしたのである。

聖なる人はこうしたことや似たようなことを言葉よりも行いで教えた。ここでは彼を称賛するためというよりも他の人々を教育するためにこのことを述べた。これを読む者は最も重要なことについて模倣すべきことを些細な行いから学ぶであろう。

彼の生き方の手本によってまるで鏡のように示される榮譽と高潔のしは他にも多くある。無知な者や信心の乏しい者はこうしたものをたやすく軽蔑するが、信心深い者や学識のある者は黄金よりも貴重なものとして得ようと努めるし、最も重要なことについて多くの気品と利益をもたらすものを些細なものともみなすこともない。

こうした話は、それを読む人、聞く人に、100人以上の目の見えない者に視力を与え、同じくらいの数の耳の聞こえない者や口のきけない者を治癒した話を読んだり、聞いたりするよりも、徳を鼓舞する大いなる教を提供するからである。聖人に奇跡が欠けているということではない。私たちが語るわずかな話から言及しなかったより多くのことが理解されるだろう。

偉大な父の生き方と行いについても多くのことが語られたので、ここで終わりにするのがよいと思われる。この後、語り残したことは別の序とともに始められる。最後に彼の死について筆を執るように時間に急ぎ立てられ、私たちの方針に求められている。彼の生き方を模倣したいと思わない者、あるいは模倣できない者も彼の死の輝かしい手本によってより善き行いへと駆り立てられるだろう。

第2巻が終わる。

第3巻の序言が始まる。

私たちは前の2巻であらかじめ定められ、当時在らしめられたオバジヌの初代院長エティエンヌ師の生き方と行いについても十分に語った。彼について言われ、また書かれたすべてのことをそこで述べようとは思わなかったが、生前に多くの人々の救いに益のあった偉大な人物の生涯が教育のために未来の人々に知られないことがないように考えた。

私たちは2巻の序でどのような理由と誰の命令によってこの重要な仕事を企図したのかを述べた。私たち自身の権威でこれを作成していたならば、書かれるべきではなく嘲笑されるのがふさわしく、多くの人々の耳に届くに値しなかったであろう。上長の命令なしに修道士に権威はないからである。命令に先んずるのは軽率であり、無視するのは軽蔑に値する。この著作について様々な方法で自己弁護することもできるだろうが、この危険な試みを神の裁きと聖なる父の援助のもとに私たちは置くことにする。2巻の小著をどうにか完成させた自信を持って、どのようなものになるのであれ、この3巻を書き終えることを願っている。私たちは軽率さから聖なる父の感情を害することをそれほど恐れてはおらず、彼に対する敬虔さのゆえに彼の恵みを信じている。かつて聖マルタンが生前のセヴェールのもとに出現し、自身の生涯について彼が書いた著作を右手で掲げたように²⁾、エティエンヌは死後に悲嘆に暮れる私たちのもとに現れ、この著述の労苦を竿ばかりで量り、押し掛かる罪の重みを持ち上げ、神の慈悲を通じて永遠の処罰から救い出し、永遠の命へと回復させるだろう。

この短い序に聖マルタンを入れるのがよいと考えたのは不当なことではない。エティエンヌの輝かしい死において聖マルタンの栄えある死を大いに描くつもりである。

聖マルタンは聖職者の間で平和が実現した後に、自身の司教座ではなく彼の裁治権下の遠くにある聖堂でこの世を去った³⁾。エティエンヌは自身の修道院ではなく彼の裁治権下の他の修道院で⁴⁾、そこで長く不在だった

院長が任命された後に、神のみもとへ旅立った。前者は主日の真夜中に亡くなり、後者も主日の真夜中に死去した。前者のことをその修道士と弟子たちが嘆き、後者のことをその修道士と弟子たちが嘆き、そして両者のことを数えきれない人々が天に上げられた叫びと哀悼により嘆き悲しんだ。人々は長く曲がりくねった道を通してこの二人を連れて行き、しかるべき葬儀の後に、しかるべき墓にしかるべく埋葬した。だから、彼の死を長々と、いわば、微に入り細に入り描いても誰も煩わしく思わないように懇願する。たとえ軽蔑する者には適切でないともみなされたとしても、敬虔な者や聖人を敬愛する者には、どんなに長くとも、歓迎されないことはないだろうと信じている。

第3巻が始まる。

1. 聖なる人がこの世を去ろうとしたとき、上述した修道院の一つはもう長い間自らの牧者を持たなかった。聖マルタンの伝記に読まれるように⁵⁾、彼は自身の生涯の終わりが近いことを知っていたが、正当に治めるためにこの修道院を訪問することを望んでいた。灰をかける習慣のある荘厳な断食の時期が近づくと⁶⁾、数人の院長たちとともにそこに向かった。彼らがやってきた用件について話し合われたが、修道士たちはまだその場にいる者たちから一人を院長に選ぶことに合意していなかった。副院長とこの職にふさわしい他の修道士を呼ぶようにオバジーヌに人が送られた。その間にエティエンヌ師は病を患ったこの地域の首席司祭を訪問するように求められた⁷⁾。彼が行ってそこから戻るとすぐに病に見舞われた。断食で疲弊した体を熱が襲い、肉体の疲れと寒気で徐々に熱が体の奥深くまで入り込んでいった。

翌日に選挙が用意され、呼び寄せた人々はすでに到着していたが、彼は一晩中ひどい病苦に襲われた。しかし、自分が死んだ場合に完全に台無しになるか、疎かに行われることを恐れて、これほど必要な仕事先延ばし

されるべきではないと考えた。彼らの集会に参加できなかったので、権威において抜きん出たある院長にこの任命を委任し、この院長は兄弟たちの助言を受けてすでに選んでいた人物を牧者として定めることになった。これは幸いにも直ちに遅れることなく何の異論もなく実現された。

2. それから、聖なる人の病が悪化し、深刻になり始めた。そのために共同の部屋からより独立した小部屋に移された。使者たちが至るところを駆け回り、彼の病気の知らせが広まった。オバジーヌの修道士たちの耳に届くと、全員が激しく打ちのめされ、信じられないほど狼狽した。どれほど安全であったとしても、どのようにして偉大な牧者が亡くなりそうなときに群れが混乱せずにいられるであろうか。「私は羊飼いを打つ。すると、羊の群れは散ってしまう」(マタイ 26 : 31; マルコ 14 : 27) と書いてあるからである。多くの人々が許可も求めずに競って彼のもとへ行行った。あるいはむしろ他の何も得られないとしても、とにかく最後の祝福を得るために殺到した。愛情深い父のようにエティエンヌは彼らを献身的な息子のようによく親切に受け入れ、一人一人を祝福し、優しい愛撫で慰めた。

残った他の人々は、まるで世界の終わりが近づいているかのように嘆きと叫びの声を響かせた。ほとんど全員が仕事を放棄し、あちらでもこちらでも涙に暮れるばかりであった。そして実際に偉大な父を失いつつある人々にとっては世界の終わりが近づいているように思えたのであった。彼とともに親しく楽しく生活していたので、彼が死んだ後にどのように生きたらいいのかわからなかったからである。

隅から隅まで嘆息で満たされ、ため息が次々と加わり、場所全体が見捨てられたことを全員が嘆き、深く悲しむのをあなたは見たであろう。実際、聖金曜日のように全員が、涙をこらえることができるならば、沈黙に身を捧げた。出会ったときに慣習通りに振る舞う人はなく、挨拶もなく、慰めもなかった。年長者が若輩の兄弟を慰めようとしても、すぐに涙があふれて、若輩者と同じように倒れ込んだ。彼の生涯に対して全員の祈りがすべ

てのミサで急いで唱えられ、群れが番人を、見捨てられた羊が牧者を、子供が母親を、息子が父親を、修道士が院長を、弟子が師を、場所が護衛を、家が管理者を、そしてもうほとんど壊れた船が最良の舵手を失うことがないようにということ以外は表立っても密かにも求めなかった。エティエンヌは彼らにとって常にこれらすべてのものであったので、「すべての人に対してすべてのものになりました。何とかして何人かでも救うためです」（1 コリ 9：22）と使徒とともに言うことができるだろう。

病状は絶望的だという知らせをたまたま受け取った後に、翌朝、もうよくなったという別の使いがやって来て、喜ぼうとしていたところに、その後、絶望を伝える使いが再びやって来て、彼に対して抱いていたすべての希望が奪い去られたのでいっそう激しく苦しむことになった。

すべてが可能であり、何かが起こる前にすべてを知り、「神を愛する者たちに万事が益となるように共に働く」（ロマ 8：28）ようにする神は、牧者が望んだ休息を楽しむように、そして羊が見放されないように計らった。また、この場所が見捨てられないように、むしろよき牧者の功德により財産の豊かさや兄弟の数が以前よりも増大して発展するようにした。私たちの神は受難の前に弟子たちに、「わたしが去って行くのは、あなたがたのためになる。わたしが去って行かなければ、弁護者はあなたがたのところに来ないからである。わたしが行けば、弁護者をあなたがたのところに送る」（ヨハネ 16：7）と言った。そして受難の後に弟子や彼を信じるすべての人はますます増え、主が説教をした時代よりも強力になったことを私たちは知っている。実際、主は「見なさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」（マタイ 28：20）と言ってかつて約束したように、彼らを通して働いた。同じように聖なる父は死後にまるで孤児のように残された人々のためにより存在感を増し、より強力になろうとしていた。

3. この聖なる人はより激しく熱に襲われていながら、望んでいた善き

ところへと移ることを喜んだ。しかし、弟子たちを孤児のように見捨てて後に残していくことを悲しんだ。このために目と手を天に向け、自らに任されたこの場所を常に照らし、守るように、神を通じて彼がこれまで集めてきた羊たちの寛大な牧者になるように、摂理により彼らを支配するように主に嘆願した。

すべての兄弟、特に彼の修道院から来た者たちが近くに立っていた。慰めようもないほどに泣いて言った。「父よ、なぜ私たちを置いていくのですか。私たちを見捨てて誰に残すのですか。私たちは貧しくても十分です。あなたを私たちの魂の牧者で指導者とみなすことで豊かだと思えるからです。そして今、あなたの後に、私たちは何をしたらよいのでしょうか。苦難のときに誰に逃れたらよいのでしょうか」。

それから、彼はできる限り彼らを慰め、教えを与え、神を常に畏れるように、そうすれば、あらゆる悪から赦すだろうと戒めた。自分のために絶え間ない祈りによって永遠の休息を楽しめるようになってくれたならば、死後には彼らのもとにいつそ姿を現し、すべての必要なものを怠りなく提供するだろうと言った。孤児として後に残すことになるオバジーヌの兄弟たちにとにかく最後の命令を出すように求められると、彼らが受け入れた聖なる修道会の規則をしっかりと守り、聖なる貧しさと謙遜の遵守を放棄しないこと、また、服従と規律の厳格さを保ち、彼のために常に主に祈ること以外は他に何も彼らに命じなかった。

この時に次のように彼らに約束したが、かつてこのような約束をわたしたちはどこかで読んだことはなかった。すなわち、救われるように自分のために神に懇願してくれたならば、全員のために、とりわけ、修道院の中で死にゆく者のために、主の慈悲を信頼して、主から永遠の救いを得るだろう、と。このために彼らを戒め、修道院から誰も離れることがないように警告した。とりわけ、修道女たちに向けて警告したが、最近、不和が高まって、神によりよく仕えるためであるかのように彼女たちの一部が他の

場所に移っていたのである。今では明らかな誤りであるが、その場所にいる者は全員が留まれるが、その後は女性の入会は認められないという噂を彼女たちは聞いたからである⁸⁾。それで、存続させるために、多くの権威に支えられ、別の場所を自分たちのために選んだのである。この時の院長ジェローは兄弟たちの助言を受けて共有財産から彼女たちのためにこの場所を譲渡していた⁹⁾。この場所は当初はあらゆる財産を備えていたが、その後はそうではなくなった。どのようにして、誰の権威により彼女たちが修道院を離れたのか、どのようにして自分たちに与えられた場所で生活したのか、どのようにして貧窮の苦しみの後に自分たちの修道院に戻ってきたのか、どのようにして財産を不当に消尽した放蕩息子のように慈悲深く寛大に受け入れられたのか、こうしたことについてはここでは語らず、私たちが始めたことをやり遂げるのがよいであろう。

4. 信心深い人や敬虔な思いから来た人しか面会を認められなかったが、病中の神の僕を見舞いに訪れる人々が尽きることはなかった。彼の聖なる葬儀のために蠟燭を持ってくる人もいて、実際、非常に多かった。すべての人が国全体の保護者、監督者として彼のために泣いた。

剃髪の様子は過ぎていたが、病気のために剃ることは許されなかった。死が襲いかかってくると、病気の身体をいっそう苦しめ、主の前に直ちに向かい、新たに戴冠して姿を現せるように剃髪を命じた。髪は聖遺物をともかく所有できるように、神の意志によりこれがなされたことを私たちは疑わない。すべての髪が入念に集められ、注意深く保管され、後に多くの病人たちに益をもたらした。

いっそう明らかに死が迫ってくると、彼の求めにより聖油が塗られ、聖体を拝領して力づけられた。それから少しして板が打ち鳴らされ¹⁰⁾、全員が至るところから集まり、彼の前で泣きながら連祷を唱え始めた。確かに彼自身このようによく繰り返させたが、死に瀕して彼らとともにできる限り唱えた。もう完全に亡くなりそうになると、ある兄弟が彼の右手を取

り、修道院とすべての兄弟に対して十字架を切った。彼はできる限りの努力をし、冷たくなる唇で弱々しく祝福の言葉を発した。こうして祝福し、祈っている間に、この聖なる魂は肉体から解放された。

5. こうして尊敬すべき父たるエティエンヌは3月8日に主のみもとへと旅立った。天は喜び、地は悲しんだが、あちらは同胞を迎えたため、こちらは牧者を失ったためであった。主の受肉から1159年の四旬節第2主日の真夜中に亡くなった。彼の遺体は慣習に従って整えられ、司祭服を着せられ、一晚中聖堂で見守られた。集まった院長たちとともに兄弟の全員が敬虔に彼の前に立ち、蠟燭の灯りで夜を徹して荘厳に祈った。しかし、朝が来て、ミサがいつも通りに行われると、どのようにして彼の遺体をオバジヌに運ぶのかについて話し合い始めた。

実際、二つの修道院の間は歩いて2日の距離があったので、非常に長い距離にわたって彼を楽に運べるような丈夫な動物を手に入れるように先を見越して助言する人がいた。他の人々、とりわけこの場所の院長は、聖霊の住み家であった聖なる身体が理性を欠いた獣の背で運ばれるのは適当でないと主張して反対した。しかるべく敬意をもって修道院から運び出すのであれば、競って運んでくれる人に不足することはないだろうと彼らは言った。

全員がこの意見に満足し、直ちに聖なる身体の手くれを運び、詩編を荘重に唱えて修道院から出た。院長や修道士や他の兄弟たちがこの前を行き、後を行った。偉大な父の葬列に様々な場所から集まったことを喜ぶ大勢の聖職者や俗人も同行した。

この修道院はかなり傾斜した場所にあったので、より高く、平らなところに彼らが来るとすぐに、この地域のすべての羊飼いが、少年も少女も家畜を置き去りにして、大急ぎで聖人の遺体に駆けつけ、棺の下をすり抜け、素早く反対側に通り抜けた。このようにすると、再び聖化されるために同じように近づいて戻り、歩いている集団に混じって足早に進んだ。これを

見た他の人々は子供たちの手本に教えられて、競うように駆け寄り、聖なる棺の下を素早く通り抜け、再び戻った。彼らは信仰の報いを受けずに、無駄にこのようなことをしたわけではない。このように通り過ぎることで多くの人が様々な病気から解放されたのである。ここで彼らの名前や人数や病気の種類について述べるのは煩わしく困難であろう。

実際、この旅の途中に多くの町や村があったので、その全住民が主日を祝うようにこれほど輝かしい光景のために至るところから駆けつけ、葬列の一団に混じり合った。通り過ぎたすべての教会や修道院で直ちにすべての鐘が非常に唐突に鳴り響いたので、これは人の手で打たれたのではなく、神により揺り動かされたのだと考えられた。

ストラを着けた司祭、白い祭服を着た聖職者、ふさわしく着衣した修道士が十字架と香炉を持って聖なる身体に向かって長い距離を進んだ。鐘の音や悲嘆に暮れる群衆の騒ぎや叫びが非常に大きかったので、誰かを赦免したり、何かの聖務を行ったりする機会はなかった。

この地方全体が悲嘆の声で騒がしくなった。彼のことをよく知る人々は国にとっての喪失を悲しみ、他の人々はこれほど小さな身体の人物が榮譽に包まれて大地よりも輝き、世界よりも大きく、天よりも高く見えるこの奇跡に涙を流した。

人間だけではなく、動物も彼のことを嘆き悲しんだ。彼がいつも乗っていた動物が死の三日前から、そして死後もたくさんの涙を流したと目撃した人々から私は聞いた。このようにして動物はこれから何が起こるのかを前もって示し、何が起こったのかを後から知らせたのである。

あまり価値のない遺物でも得ようとして激しく争い合っているというのに、この輝かしい身体については何を言うべきであろうか。彼を運ぶために近づくのは容易ではなかった。棒を持った番人たちが、いきなり突進し、聖遺物の一部を奪おうとする人々を四方で威圧していたからである。しかし、指先や棺に触れたことは少なからぬ慰めであった。その時、院長や

他の人がかつて言っていたこと、すなわち、聖人の遺体を競って持ち帰ろうとする者が絶えることがないことが明らかになった。どれほどの熱意で彼の聖遺物を得ようと努めたかを知るための例として、聖人の靴の紐を持ってきてくれたならば、1マルクの銀を提供すると約束した有力者が一人いた。

多くの人は自発的、意図的に靴を脱いで、岩や尖った石の上を聖人とともに進み、血を流し、負傷して戻った。

男性たちのこの信仰は驚くにあたらない。女性たちもそれだけ敬虔に競い合ったからである。高貴な婦人たちが寝室を捨て、女性の慎みを忘れ、あちらこちらで男たちと一緒に急ぎ、聖人の墓に熱心に駆けつけた。以前はか弱くて行けなかった人も今や沼地や困難な場所をためらうことなく進んだ。高価な衣服を気にもせず、ぬかるみに彼女たちの優雅さのすべてを投げ捨てたが、聖人の葬儀の際に見せつけた破れたり汚れたりしたものはなんでも聖遺物のように考えたのである。男性のように聖人の柩を担ぎ、男性よりも力強く長い旅の道を運んだ。

この土地の領主である副伯妃がその一人であった¹¹⁾。秘所に関する深刻な不治の病を患っていたが、この時もその後も非常な力を得たので、今日まで最高に健康な状態を保っている。この土地のすべての人を葬儀に招き、旅の費用を提供するので、彼女の教会の一つで聖なる遺体とともに一夜を明かすように一心に祈って懇願した。しかし、これは実現しなかった。兄弟たちが夜を過ごすために旅の途上にある最も近くのグランギアに出かけたからである¹²⁾。彼らはこの女性から何か暴力を受けるのではないかと恐れた。

しかし、彼女は自分に残されたことを遅滞なく果たした。すなわち、通過した場所の人々や家畜にパンや必要なものを送ったのである。このために60匹の魚だけが提供され、それぞれの魚が200人もの人にもたらされた。さらに、ワインは1頭のロバが二つ運ぶ種類の樽が一つ分だけあった。

容器に注がれると、聖人の力により増大し、一晩で500人以上の渴きを十分に癒し、翌日も多くが残ったほどであった。

遺体は兄弟たちの住居ではなく、外にあった非常に大きな建物に安置された。より多くの人々が迎えられ、敬虔な女性たちに入出入りが禁止されないようにするためである。この建物は全体が木造で藁葺きであった。聖人を称えるため、そして訪問者の休息のために、この藁を膝の高さまで床に敷き詰めた。非常に多くの灯りのついた蠟燭が中にあったので外から見る人には薪の山のように見えた。

あらゆる驚異の中で最も驚くべきなのは、これほどの量の藁の中で、これほど多くの眠っている人と半分目を覚ましている人の中で、炎によって何も損われなかったことだと考える。目が覚めていた人も聖なる遺体の周囲で聖務に忙しく、残りの人は半覚醒の人や完全に眠っている人の周りにいたからである。

それから、今まさに夜が始まろうとする頃、アルバを着ている、そして多くは絹のカッパを着用している聖職者全員が最初の徹夜の祈りを厳かに執行了。これが終わると、残っていた人々や、夜通し集まり続け、様々な場所からこの時に集まった人々がまた夜を徹して祈る準備をした。こうして一晩中交代で祈り続け、聖なる見守りが止むことはなかった。詩編を唱える聖職者の声ときらめく灯火の輝きによってこの夜は昼の明るさと壮麗さを獲得した。「闇もあなたに比べれば闇とは言えない。夜も昼も共に光を放つ」(詩編 138:12) と書かれているように。

6. 朝に起きると、聖なる身体を担ぎ、できるだけ早くオバジーヌへと急いだ。テュル修道院が彼らを待っていた。その院長と修道士たちが自分たちの聖堂にしばらく遺体が置かれるように主張していたからである¹³⁾。そこに近づくと、鐘が鳴り、厳かに着飾った修道士の全員が十字架と香炉を持って民衆とともに聖なる身体へと長い距離を歩んだ。彼らは遺体を聖堂に力づくでも引き留め、何かを聖遺物として奪おうと——その

後明らかになるのだが——申し合わせていた。これを予見し、赦免が与えられた後に直ちに兄弟たちは聖人の身体を肩に乗せて引き返し、来た道を戻った。

7. オバジーヌでは月曜の朝になるまで聖人の死が知らされていなかった。それから、一時課の後にすぐにミサが行われ、全員が、最も地位の低い者から最も高い者まで、十字架を先頭にして、涙を流し、嘆き悲しんで、聖なる父に向かって2000歩の距離を進んだ。この旅の間ずっと苦しみの中でできる限り詩編を唱えた。聖人の遺体とともにでなければ戻らまいと彼らは決めていた。聖人の葬列から来た兄弟たちが彼らを追い払い、聖人が来るまでに長い時間がかかるからと言って帰るように迫ったが、始めた旅を阻止することは決してできなかった。

もう疲れ果ててある丘の平らなところに到達したとき、目を上げると不意に群衆とともに聖なる葬儀の集まりがテウル修道院から出て、自分たちの方に大急ぎで進んでいるのを見た。そこに多くの貴族が数えきれないほどのあらゆる年齢の男女とともに来ていた。彼らの多くが新しい蠟燭を持ってきていて、灯りをつけて聖人が来るのを修道士やすべての人とともに待っていた。

そして、見よ、彼が姿を現し、身近にいて、触れることができるようになると、突然大きな叫びが沸き起こったので、地上だけでなく、天上もいくらか揺り動かされているように思われた。私はこれまでこれほどの大きな恐ろしい絶叫、これほどの嘆き、これほどの叫び、さらにこれほど同時に涙が流れるのを見聞きしたことがなかったことを告白する。実際、敬愛する父の周囲で多くの子供たちが嘆き、死者の遺体を虚しく希望もなく抱きしめるのを見て、涙を流すのを抑えられるほどの鉄の心をいったい誰が持っているであろうか。馬で来た人々は手綱を放ち、地面に倒れ、涙で濡らし、耐え難い嘆息を發した。今や兄弟たちの間ではいかなる秩序も規律も節度もなかった。手だけでなく歯で聖人に襲いかかった。狂人のように

我慢できずに棺に嘔みつき、番人が立ちほだかり、群衆と同様に修道士を叩いて追い払わなかったならば、完全に嘔み碎いてしまっただろう。聖人は完全に司祭の服をまっていたので、手だけがキスするためにすべての人に晒されていた。その手はまだ温かくて柔らかく、生きている人の手と異なるところはなかった。

このような道を通じて彼らは聖人の身体を取り上げるというよりも奪い去るように持ち帰り、オバジーヌ修道院へとすべての人々とともに急いだ。

8. そういうわけで、私たちが彼とともに修道院に着くと、すでに詳しく述べた尊敬すべき主たる院長ジェローがもう来ていて¹⁴⁾、聖なる服を着て、残っていた少数の人や外から集まった多くの人々と一緒に待っていた。棺が現れ、そこにいつも修道院において、また神の業においてしっかり立つのを見ていた聖人が横たわるのを見て赦免の準備をすると、突然、気を失い、死んだように棺に倒れかかった。この時、全員の悲しみが新たになり、以前に何もしなかったかのように、あの丘の上と同じぐらい叫びと嘆きの声を上げた。人間の魂は、悲しみと涙に十分に暮れていても、他人が泣くのを見ると、涙を抑えることができず、涙を流す原因がなくなる限り、涙は止まらないのである。

ようやく回復した院長は赦免の言葉を口にするのもやっとのことであったが、力の限りを尽くして聖なる人を赦免した。

新しい修道院は境界の外に位置していたので、待っている人々、とりわけ女性たちのためにこの尊敬すべき身体を晩までそこで見守っていた。それから、夜になると、聖堂まで詩編を唱えて恭しく運ばれた。そこで一晩中、翌日もその夜も、水曜日までずっと見張られた。聖堂に身体がある間は、慣習的な典礼は維持できなかった。群衆がひしめき合い、奉納物を持ち、手と棺にキスをし、棺の下を行き来していた。一方、聖人の前ではまるで彼がまだ生きているかのように苦情を訴え、援助を嘆願する人々がい

た。

その人たちが出ていく間にも、他の人たちが入ってきて、その後にはまた他の人たち、またさらに他の人たちと、出入りする人の群れが絶えることはなかった。もし誰かが彼らを妨げようとしたならば、すべての障害物を暴力的に打ち壊し、深刻な破壊をもたらしただろうと信じている。

修道院の兄弟たちや集まった群衆の中の多くの病人が治癒された。ある者は麻痺、ある者は腫瘍、またある者は頭痛と様々な熱病の襲来、さらには狂気が治った。ここで眠っている間に、棺の下を通過している間に、外に置かれている間に、あるいは旅の間に治癒した人々の名前や人数は記録するために収集できなかった。非常に数が多かったこともあるが、とりわけ誰もこの時は彼の伝記の執筆を決意し、構想していなかったので、そのようなことを気にする者がいなかったからである。

こうして人々の期待のためではなく、墓の準備のために、そして院長たちが、実際そうしたように、遠くからなんとか葬儀に駆けつけられるように、二日間遺体が見守られていた。こうして全員が揃った。

9. 四旬節第2水曜日に一般ミサが執り行われた後に、この時この地方には司教がいなかったので¹⁵⁾、様々な地方や修道会から来たすべての院長たちが厳かに赦免を行った。聖人の身体が埋葬のために集会室に運ばれ、石棺に納められた。

兄弟や修道士の集団とともに数千人もの人々がいた。彼らは中も外も埋め尽くし、回廊や集会室付近に群がっていたので、蠟燭の灯りは別にして、日の光の明るさは奪われ、詩編を唱える人々の声は悲痛な叫びでかき消された。こうして埋葬されるとすぐに遺体の敷き物が引き裂かれ、細切れにされ、それぞれができる限り自分の分を奪い取り、これをめぐって頑なに争い合った。棺そのものがのこぎりで切断され、鉄製の道具で細かい部分に切り刻まれ、奪い去られた。のこぎりの歯から落ちた小さな破片を小さな布に結んで、持ち帰る人もいた。人々の信仰と信心は非常に強かったの

で、聖人の身体に触れたもので効験のないものはないとされた。

10. これが終わると、すべての人が立ち去った。修道士たちは墓の周りに集まり、聖金曜日の慣習通りに晩まで終日詩編を唱え続けた。しかし、そこでは蠟燭が昼も夜も燃え続け、今日まで毎晩、油の灯りや蠟燭の灯りやその両方の灯りが絶えることは決してなかった。これらのどれも修道院が支出したのではなく、すべて外部から、すなわち墓を信心深く頻繁に訪れる人とそこで多くの治癒を経験した人から提供されたものである。自宅で聖人に祈願して治癒した人は蠟燭をそこに送るか、あるいは治癒の前にお願いするために、または後に感謝するために自分で持ってくるのである。

人々は人間のためだけでなく、病気の動物や家畜のために祈願した。動物たちのために蠟燭を送り、「主よ、あなたは人をも獣をも救われる」(詩編 36:7) と書かれていることが実現されるようにした。動物たちのためであっても彼らの祈願は無駄ではないことが知られている。病んだ動物はすぐに治癒し、その後は病気にならなかったからである。

野蛮な迫害の際に敵の暴虐により至るところですべてが荒廃したとき、彼のところに逃げ込み、保護を得た人々がいた。他の人々は財産をすべて一度に失ったが、彼らは財産を失い、捕虜にされることはなかった。多くの方は財産を失った上に敵の捕虜になり、足をきつい木の枷で拘束するために鎖につながれ、牢獄に入れられる人もいた。祈願されるとすぐに聖人は現れ、立ち上がり、拘束している枷をはずすように彼らに命じた。すぐに腐っているかのように木の枷がばらばらになった。解放されると、「主よ、すべてが閉ざされ、番人が両側を監視しているのに、どのようにしてここから出たらよいのでしょうか」と言って訴え始めた。すぐに彼は裏口まで彼らを導いた。この戸は斧や鉄の道具でもほとんど壊せなかったが、今やちょっと手で押すだけで簡単に開いた。彼らを捕らえた人々の群れの中を導いたが、誰もどこに行くのかを尋ねもせず、まして留めようともしな

かった。

これは最近亡くなった私たちの兄弟の一人に完全に起こったことである。これが彼の回心の主な理由であった。多くの証言で確認されるように、このように解放されたのは彼だけでなかった。しかし、このように聖人の力で解放された人々の身元を私たちは記憶していないし、起こったことの真実を彼ら自身の口からこれほど明らかに知ることはなかった。しかし、この話題については、何人かの解放について私たちは明確に語るだろう¹⁶⁾。こうした話から同じように解放されたと話には聞いているが、記憶していない他の多くの例が理解されるようにするためである。

今や死後に彼に関して観察されたことについて、そしてどのように誰のもとに頻繁に現れ、出現することで健康を与えたのかについて語られるのがよいであろう。

11. ある兄弟がエティエンヌの死後に非常な悲しみにとりつかれ、悲しみに呆然としていると、聖なる人が幻視に現れ、「兄弟よ、なぜそんなに深い悲しみに沈んでいるのか」と彼に言った。「主よ、私たちは悲しみ、激しく苦しんでいます。私たちのために長生きし、あなたの修道院を豊かに幸せに治めることができたのに、これほど早く私たちを見捨ててしまうことを望まれたからです」と兄弟は答えた。「それでは、いつも見慣れていたように、私はもう院長にあなたには見えないのだろうか」と聖人は言った。「もしあなたが本当に私たちの院長であるならば、私たちがあなたの代わりに別の人を見ているのはどうしてですか」と兄弟が言った。すると、聖人は楽しげに微笑むようにして、「私はその院長のためにあなたがたを見捨てなかったし、見放すことはない。彼がどこに行ったとしても、私はいつもあなたがたとともにいる」と言った。

12. ロベール師は当時フルナド院長であったが、3回目の叙任の後に私たちの修道院を治めた¹⁷⁾。私たちの至聖なる院長の葬儀が終わった後に、食堂で院長は兄弟たちと食卓についた。このような際に起こりがちである

が、疲れと悲しみで少しうとうとした。突然、数年前に亡くなっていた二人の私たちの兄弟が彼のもとに現れた。一人は司祭、もう一人は助祭であり、かつて私たちがよく知っていた信心深い敬虔な人物たちであった。彼らが陽気な表情で悲しみの理由を尋ね、院長が涙を流して聖人の死と全員の喪失について続けて話すと、次のように言った。「主よ、彼の死去についてあなたがたの間で悲しみが大きいように、私たちの間ではどこでも彼の存在について喜びが大きいことを知るように」。こう言われた後に目を覚ますと、もう彼らを見ることはできなかった。

この院長は自分の修道院に戻った後、聖堂に座り、ある亡くなった兄弟の遺体を兄弟たちと見守った。墓の準備が遅れ、愛する人を失った悲しみの中、眠りに沈んだ。この兄弟が彼の前に立ち、「主たる父よ、私を憐れんでください。そしてできる限り、私を助けてください」と叫んで言うのを見た。院長は「どうしたのか。何を苦しんでいるのか。私に何をしてほしいのか」と言った。「私は共通の父であるエティエンヌ師の近くにおりました。他の私たちの兄弟は彼のもとに逃げましたが、彼の戒律に従わなかったので私のことは受け入れようとしません。私の院長のところへ行けば、私を助けてくれるだろうと言いました」と彼は答えた。その時、院長は恐怖で目を覚まし、この兄弟はもう彼のもとに現れなかった。それゆえ、戒律の遵守を怠り、聖人に非難されたことは明らかであるが、院長に祝福を求め、彼の魂が罰と苦しみから解放されたので、彼は忘れられたわけではなかった。

13. 聖人の死去からだいぶ後に、世俗で非常に卓越した有力な騎士がこのオバジーヌ修道院に来た。そこで病気に襲われ、2カ月後に亡くなった。多くの土地の領主だったので、これを防衛するために多くの戦闘を行い、多くの悪事もなした。聖なる人とすべての兄弟をととても愛し、自分が支配する土地の財産を拡大させた。このおかげで、私たちが信じ、知りうる限りでは、彼はよき告白とよき臨終に導かれた。

しかし、彼が亡くなったその晩、彼の土地の司祭が、遠くにいたのでこの領主に何が起きているのか全く知らなかったが、突然、恍惚にとらわれ、彼が悪魔たちに捕らえられ、連れ去られるのを見た。彼が連れられていった場所の一方に頂上が見えないほど非常に高く立派な壁があった。真ん中に門扉があり、そこから詩編を唱える非常に甘い声が外に漏れてきた。そこに近づいていくと、その蜜のように甘い声を聴くために少し開けるように連れ去った悪魔たちに懇願し始めた。求めた通りに全くならなかったが、突然、神の意志により悪魔たちから引き離された。彼はさっきの扉のところに逃げ、それが開いていることに気付いた。さらに、聖なる神の母にして乙女の女王が聖人たちとともに中に立っているのを見て、地面に倒れ、自分を憐れんで慈悲により悪魔の捕囚から解放するように嘆願し始めた。「ああ、人間よ、私はあなたを助けることはできません。あなたは私と私の息子の多くの教会を襲撃し、略奪し、冒涇したのですから。あなたはまた多くの人間を殺害し、他の多くの悪事を行いました」と彼女は答えた。その時、そこに立っていたエティエンヌ師が跪き、「女主人よ、私の家で死ぬすべての者をあなたのご子息の喜びに導くとあなたは私に約束されませんでしたか」と言って彼女に祈った。「最愛の息子よ、あなたに約束したすべてを明確に実行することをよく承知しておきなさい」と情け深くうれしそうな様子で答えた。こう言われた後に、司祭は恍惚の境地から目覚めた。この男についてこれから何がなされるのかは司祭には完全にはわからなかった。この男が悪魔に引き渡されたのは、邪悪な生き方をして誰に仕えていたのかを知るためであり、次に、聖人の執り成しで慈悲の母に解放されたのは、特に愛する者への神とその母の慈悲を通してどれほど多くをエティエンヌが得ることができるのかを知るためであることは十分に明らかである。

14. ある純朴で無垢な助修士は聖人を並外れて愛し、聖人に特別に愛された。ある主日に徹夜の祈りのために他の人々より早く起き、修道士の回

廊をいつものように通り過ぎると、行列を行っているかのように詩編を唱える修道士たちの声を聞いた。その中で神の人の声が、まるで行列を率いているかのように、より明瞭に力強く響きわたっていた。夜のためこの回廊は閉鎖されていたので、もっと容易に詩編を唱える声を聴き、できるならば、神の人が自分の席に立っているのを見ようと聖堂に急いで行った。しかし、中に入ると、さっきの声は静まり、もう聞こえなくなった。

したがって、前の幻視の話とこの確かに聞いた話から、神の人がこの場所をなおざりにすることはなく、私たちが眠っている間も、聖堂と回廊で神を称える聖務を唱えていることは明らかである。

15. ある若くて丈夫な兄弟は牛の犁を担当していた。重荷を持ち上げたため、あるいは他の理由から破裂を患った。より明確に言えば、重いヘルニアになった。この重みが鼠径部から飛び出て、日に日に大きくなったので、この兄弟は歩くのも嫌になり、気力を失った。この部分が飛び出ているのを恥じたが、大きいために隠すこともできなかった。こうした不都合は切開をせずには治せなかったが、その処置はかつて私たちの修道会では禁止されていた。この病気が重くのしかかり、治る見込みもなかったのでよりいっそう不安になった。そのため、人の援助がないので、神の援助に頼った。たびたび聖なる父エティエンヌの墓の前にひれ伏して、非常に苦しんでいる自分を救いの治癒で助けてくれるように絶えず懇願した。こうしてある夜に聖なる人が彼のもとに現れ、なぜそんなに叫んで疲れているのか、なぜそんなに悲しんでいるのかとまるで知らないかのように尋ね始めた。兄弟が自分の苦しみをすべて彼に説明すると、次のような慰めを受け取った。「息子よ、この病についてそんなに悲しんではいけない。まもなくあなたは神に治癒されることになるから」。

兄弟は目を覚まし、どんな治癒も自分に生じていないことを確認した。しかし、神の人を見ることができたので、この慰めに大いに喜んだ。それからしばらくして聖人は再び前と同じように彼のもとに現れ、どんな様子

かを尋ねた。兄弟は訪問に感謝し、それまで全く助けを受けていないと答えた。すると、聖人は神の意志により飛び出た腫瘍を癒しの手で圧して、押し戻すようにして完全に治した。「立ち上がりなさい。これ以上は無為に過ごしてはいけない。あなたに命じられた仕事を熱心に果たすようにしなさい」と言った。こうした言葉にすぐに目を覚まして起き上がり、患部に触れると、まるで何の病にも罹ったことがなかったかのように、外側が平らになり、内側が固くなっていることに気付いた。

長い間青白い顔をし、今にも死にそうな様子だった兄弟が今では壮健で澁刺とし、自分の仕事に精を出していると院長自身の口から最近私は聞いた。

16. エティエンヌは病気の修道女のもとにも時々出現したが、とりわけ彼女たちの誰かが死に瀕しているときに現れた。最近ある修道女が私に話してくれたところによると、姉妹のうちのある者がいまわの際にあり、全員が慣習通りに彼女の周りを囲んで連祷と詩編を唱えていた。彼女はまだ生きていたので、全員が自分のベッドに戻った。この話をしてくれた修道女が靴を脱いで横になろうとしたが、さっきの姉妹のことが気になっていた。突然、聖人がベッドの前に立ち、「できるだけ早く起き上がりなさい。あの姉妹が今亡くなろうとしている」と言った。このように言うとなすぐに、板の音が聞こえ、他の修道女たちが集まり、祈っている中、この姉妹は穏やかに亡くなった。

注

- 1) 『聖ベネディクトの戒律』2章28節参照。箴言23：14や29：19が引用されている。
- 2) Sulpicius Severus, *Epistola II. Ad aurelium diaconum*, ed. J.-P., Migne, *P. L.*, XX, 179.
- 3) 聖マルタンはカンドで死去した。 *Vie de Saint Martin*, ed. J. Fontaine, t. I, Paris, 1967, p. 339.
- 4) ボネーグ (Bonnaigue) 修道院のことである。
- 5) *Vie de Saint Martin*, p. 337.

- 6) 1159年の灰の水曜日は2月25日である。
- 7) サン・テグジュベリ首席司祭と考えられる。
- 8) オバジーヌがシトー会に加入する際に修道女の存在が問題視された点については、2巻12章を参照。バリエールは急成長するコワルー修道院への入会の一時的な制限の措置が悲観的に解釈され、こうした噂が広まったとしている。
Barrière, B., *L'abbaye cistercienne d'Obazine en Bas-Limousin: Les origines, le patrimoine*, Tulle, 1977, pp. 106-108.
- 9) エティエンヌの後継者のジェローは当時娘修道院のラ・ガルド・デュー修道院長であった。
- 10) 兄弟の死に際して板 (*tabula*) が鳴らされ、共同体メンバーが集められることは慣習律で規定されている。*Les Ecclesiastica Officia cisterciens du XIIe siècle*, ed. D. Choisselet & P. Vernet, Reiningue, 1989, p. 268.
- 11) コンボルン副伯アルシャンボーの妃。
- 12) ヴェリエール (*Veyrières*) のグランギア。
- 13) テュル院長はジェロー・デスコライユである。
- 14) 2巻15章および3巻3章を参照。
- 15) この時にローマにリモージュ司教が滞在していた可能性をオブランは指摘している。
- 16) 捕囚の解放については、第3巻20章を参照。
- 17) 第3代オバジーヌ院長 (1164-1188) である。